
平川南館長を送る

久留島 浩・青山 宏夫
大久保純一・藤尾慎一郎

2005（平成17）年9月から2014年3月までの8年と6ヶ月の間、館長事務取扱、館長を歴任された平川南館長が2014年3月に任期満了で館長職を辞されることとなった。2003年6月以降、大学共同利用機関法人人間文化研究機構（以下、機構）検討委員、2004年4月に法人化されてからは機構理事として、機構の制度設計と始動に尽力されたが、2005年9月以降の半年間は理事と館長事務取扱とを兼務するというハードな勤務形態をとられた。その意味では、できたばかりの機構本体と法人化したばかりの国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の両方の舵取りを任され、大学共同利用機関としての体制や方向性を確かなものとするため、多大な力を注がれたのである。なお、2001年、02年にはそれぞれ数ヶ月間、館長不在の期間が生じたが、そのたびに平川館長が館長事務代理を務めて円滑な館の運営に尽力されたことについても付記しておかなければならない。

このように平川館長が先導した内容は機構をも含めて多岐にわたるのだが、ここではおもに歴博における館長としての功績を以下の3つに分けて紹介する。研究については学界の評価に委ね、代わりにていねいな業績目録を付すことにしたい。

（久留島 浩）

1 法人化に伴う歴博の使命の明確化と体制作り

平川館長は、将来計画に関する会議を3回にわたって設置し、法人化後の歴博の使命、具体的な研究・展示のあり方、それを実現するための体制作りを行った。まず、2005（平成17）年9月、館長事務取扱に就任された平川館長は、法人化後間もない機構のなかにあって、創設から四半世紀を経ようとしていた歴博の存在意義を、改めて問い直すことの重要性を認識され、その広い視野と高い先見性から、他の機関に先がけて将来計画の策定に着手された。平川館長のリーダーシップのもとで取りまとめられた将来計画は、歴博の理念と基本方針を定めたものであり、そこで提唱されたミッションステートメントや〈博物館型研究統合〉という新しい研究スタイル、共同利用性の充実等の推進は、その後の歴博における確かな指針となっている。

平川館長は、このときに定められた理念と基本方針を直ちに実行に移すとともに、その後も常に将来を見据えた展望のもとで、歴博の進むべき航路を指し示された。さらに、この指針を『歴博のめざすもの REKIHAKU: The Future of History』（2007年3月）として刊行することによって、歴博の存在意義を国内外に対して広められるとともに、博物館という形態の研究機関のあるべき姿を提唱し、国内外の博物館を牽引する役割を果たされた。とくに博物館型研究統合という理念のもとで事業展開する新しい研究博物館のあり方については、国外の博物館等からの反響も大きく、こ

れによって国際交流がいつそう推進されることになった。

この点で特筆すべきは、韓国の国立中央博物館・国立民俗博物館・国立文化財研究所、中国の社会科学院考古研究所、米国のイリノイ大学をはじめ10を超える大学・博物館などと学術交流協定を結び、研究・展示事業を国際的に展開することを館の方針として明確に示されたことである。なかでも、2011年秋には、カナダ文明博物館（オタワ）との間で結んだ学術交流協定にもとづいて、特別展示「伝統と革新の国 日本」を共催することを主導され、これによって、海外の歴史系博物館で日本の歴史を展示というかたちで示すことが、現在の国際関係のなかでいかに重要なのかを実証してみせたことは、ミッションステイトメントに謳われた「未来を切り拓く」歴史学の実践として意義深い。

さらに、平川館長は、この新しい理念と基本方針を実現するために、組織改革にも積極的に取り組まれた。2007（平成19）年7月、執行部体制、副館長2名体制、研究推進センター・博物館資源センター・広報連携センターの3センター制等を導入され、歴博の運営と事業推進に関する、創設以来の抜本的な改革を成し遂げられた。これは、現在の歴博の骨格をなすばかりでなく、今後の歴博がその存在意義を発揮してさらなる発展を遂げるための礎を築いたものといえよう。

（青山宏夫）

2 共同研究の推進

2007（平成19）年1月に出された将来計画検討会議の答申をもとに設置された研究推進センターと、運営会議のもとにおかれた共同研究委員会（2006年設置）との両輪のもと、第2期中期計画（2010～15）にもとづく歴博の共同研究がスタートした。それは、平川館長が強調されるように、①自然科学との学際的融合の推進、②国際関係・国際的視点を重視した日本の歴史・文化研究の推進、③これらを踏まえた基幹研究の成果にもとづく総合展示の新構築、という3つの特徴を持つものである。

①自然科学との学際的融合の推進は、炭素14年代測定法をもとに新しい時期区分を可能とする年代歴史学研究、青銅器の鉛同位体比をもとにした産地推定研究などに代表される。②国際関係・国際的視点を重視した日本の歴史・文化研究の推進については、日韓の遺跡から出土する文字資料をもとにした古代文字研究、炭素14年代や鉛同位体比を利用した日韓の国際交流事業がその代表であるが、機構の研究プロジェクト「日本関連在外資料の調査研究」において歴博が中核を担ってきたシーボルト関連資料や北南米への移民関係資料の調査研究もこれにあたる。また、③基幹研究の成果を踏まえた総合展示の新構築については、2008（平成20）年に第3展示室（近世）、2010年に第6展示室（現代）、2013年に第4展示室（民俗）を相次いでリニューアルオープンもしくは新しく開設したことがあげられる。さらに、2016年度にリニューアルオープンを予定している第1展示室（古代）も準備を始めている。いずれも、館内外の多くの研究者を展示プロジェクトに組織して行った共同研究の成果によるものであり、展示の過程で多くの新たな研究課題を発見し、また多くの資料を共有の研究資源にすることができた。この点は、2006（平成18）年に館長主導で提唱し始めた博物館型研究統合の、「目に見える」実践的成果となっている。

さて、平川館長は、古代史研究者として、歴史研究の現代的意義をつねに念頭において自らの研究を進めるとともに、歴博の運営にあたられた。このようななかで、2011（平成23）年3月11日

に発生した東日本大震災は、我が国の社会構造そのものだけでなく、学問体系に対しても再検討を迫るものであった。未曾有の大災害を受けて歴博では、平川館長の発案で、広義の「歴史学」をどのように新たなかたちで進めていくのか、新たな学問・研究の課題やあり方をどのように考えるべきかについて、教員執行部での議論を始めた。そのなかで、今後も持続的に行われる被災地の復興にあたって、その地域社会で暮らしてきた人びとが継承してきた有形・無形の歴史や文化がどのように活用できるのかという現代的課題を盛り込んだ基幹研究「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」を2012（平成24）年度から4年計画でスタートさせることになった。さらに、2012年3月には、この大震災のときの経験と反省をもとに、歴史民俗系の博物館の非常時の協力だけでなく、平常時にも連絡し、協力しあうことのできるような全国組織（歴史民俗博物館協議会）が結成されたが、この設立にあたって平川館長は江戸東京博物館の竹内誠館長とともに、最初の声をあげられた。博物館型研究統合の理念を実現するなかで、歴博の果たすべき役割を明確にしてきたことがこうした全国組織の速やかな結成につながったものであると評価できる。

（藤尾慎一郎）

3 現代・民俗展示のオープン

—第1期展示の総仕上げともいえる第6室(現代)と、3室(近世)、4室(民俗)の再構築

平川館長は、博物館型研究統合による事業の成果発信の場として総合展示が果たす重要性について、つねに強調してこられた。1930年代までの歴史叙述しかできていなかった総合展示を現代(1970年代)まで完成させるとともに、学界の最新の研究成果を踏まえた展示リニューアルを館のトップの立場から推進された。館長在職中の2008（平成20）年に第3展示室「近世」をリニューアルし、さらに2010年の第6展示室「現代」の新規開室によって、開館以来の悲願である、日本の歴史と文化を全時代にわたって展示する国内唯一の歴史民俗系博物館となったのである。開館以来の悲願はここに達成されたといってよい。このうち、とくに現代展示は、歴史的評価の確定していない事柄も多く、そのため歴史認識をめぐる意見の対立が生まれた。開室直前に、展示プロジェクトの検討内容やパネルの内容の一部がマスコミに流出するという不測の事態がおこったこともあって、開室前後には大きな混乱を生じた。しかし、この難局は、なんとしても現代展示をやり遂げねばならないという平川館長の強い信念によって乗り切ることができた。そこには、歴史認識を異にする人々の相互理解を実現するためには、研究成果を展示を通して〈発信〉するだけでなく、広く学界や社会からも〈受信〉するという「開かれた姿勢」を館外に示すことが重要だという館長の判断があった。2012年には、入江昭氏と大門正克氏を迎えて、講演・対談「現代史を展示する—国立歴史民俗博物館の現代展示の意義と課題—」を自ら企画・実施し、この新しい現代展示に対する評価と現代を展示することの意義について改めて問う場を設けるなど、一貫して歴博の総合展示のたゆまない向上をはかろうとされたのである。

続いて、2013年春には、第4展示室「日本の民俗文化」もリニューアルオープンした。学術研究の進展と社会の要請に迅速に対応して間断なく新構築をおこない、歴博の総合展示は「進化しつづける」ものだという重要な理念（館としての大原則）は、平川館長時代に確固たるものとなったといっても過言ではないが、それも古代史の専門家という枠を越えた平川館長の歴史家としての広

い視野と高い見識にささえられてのことである。

また、研究成果のタイムリーな発信の場である企画展示においても、「正倉院文書展」(1985年)、「古代の碑—石に刻まれたメッセージ—」(1997年)などで重要な役割を担うとともに、「古代日本文字のある風景—金印から正倉院文書まで—」(2002年)では、展示プロジェクト委員代表として長年の古代文字文化研究の成果を公開されている。館長としての立場からは、企画展示の内覧会に館長としての挨拶を述べるにとどまらず、くらしの植物苑の特別企画、総合展示室の特集展示という比較的規模の小さい展示においても、その初日にあたる展示解説にはかならず顔を出された。そして、現在の館の展示活動がどのような状況にあるかをつねに把握しようと努められるとともに、担当者の労をねぎらうことも忘れてはおられなかった。このような平川館長の歴博の展示に対する強い思いは、博物館型研究統合の理念とともに館内に浸透し始めているということができよう。

(大久保純一)